

活動と資料

看護学生の老年看護学実習による エイジズムの変化



松田 理沙¹⁾, 松井 宏樹²⁾, 平田 弘美³⁾

¹⁾ 関西医科大学附属病院

²⁾ 滋賀県立大学人間看護学部

³⁾ 日本福祉大学看護学部

要旨 核家族化が進んだ日本では高齢者との会話が乏しく、高齢者と同居をしていない看護学生は高齢者に関わることに拒否的であり、ケアの関心も低いといわれている。先行研究では、おおむね看護学生のエイジズムは臨床実習や高齢者との交流の場をとおして肯定的に転化すると報告されているが、看護学生のエイジズムの変化を縦断的に調査したものはほとんどない。本研究では、本学の看護学生が老年看護学の学習や老年看護学実習後で、エイジズムがどのように変化していくのかを調査した。本研究の目的は、老年看護学の学習や老年臨床看護学実習後で看護学生のエイジズムが変化するのかを明らかにすることである。日本語版 Fraboni エイジズム尺度を用い、本学部1年生を対象とした老年看護学概論(後期)の最初の講義時に1度目のアンケート調査を実施し、3年生後期の老年臨床看護学実習後に2度目のアンケート調査を実施した。その結果、老年看護学実習前よりも終了後に看護学生のエイジズムが低くなっていた。また、老年看護学実習後のアンケートの自由記載から、実習をすることで高齢者の人生観や価値観を理解し、それを看護に活かす必要性を学んでいることが明らかになった。

キーワード エイジズム, 老年看護学実習, 看護学生

I. 研究の背景

わが国の高齢者人口に占める割合(高齢化率)は、昭和25(1950)年には総人口の5%に満たなかったが、昭和45(1970)年に7%を超え、さらに、平成6(1994)年には14%を超えた。高齢化率はその後も上昇を続け、現在、27.7%に達している(内閣府, 2018)。また、65歳以上の入院患者は全体の7割を占め、外来患者はおよそ半数を占める(厚生労働省, 2014)。これらのことから、今後も高齢者人口の増加が推測され、病院に入院する患者や施設に入所する利用者のほとんどが高齢者であり、現在の看護学生は将来多くの高齢者とかかわることが推測される。

しかし、日本の世帯割合では、昭和55(1980)年では世帯構造の中で三世帯世帯が一番多く全体の半数を占めていたが、平成27(2015)年では夫婦のみの世帯が一番多く約3割を占めており、単独世帯と合わせると半数を超える状況である(内閣府, 2017)。核家族化が進んだ日本では、敬老思想の意識が低いことも指摘されており(手島, 2015)、看護学生は高齢者に対する否定的なイメージや偏見を抱いていることが考えられる。また、高齢者と同居をしていない看護学生は高齢者との会話が

乏しく、高齢者とかかわることへ拒否的であり、ケアの関心も低いことも報告されている(三輪, 金原, 2015)。

先行研究において、看護学生のエイジズムに関する研究は多く、おおむね看護学生のエイジズムは臨床実習や高齢者との交流の場をとおして肯定的に転化している。しかし、先行研究では、老年看護学の学習や実習によって看護学生のエイジズムが変化するのかを縦断的に調査したものはほとんどない。そこで本研究では、4年生大学の看護学生が老年臨床看護学の学習や老年看護学実習後で、エイジズムがどのように変化していくのかを調査した。

Nursing Students' Ageism Changes by Clinical Practicum in Gerontological Nursing

Risa Matsuda¹⁾, Hiroki Matsui²⁾, Hiromi Hirata³⁾

¹⁾ Kansai Medical University Hospital

²⁾ School of Human Nursing University of Shiga Prefecture

³⁾ School of Nursing Nihon Fukushi University

2019年9月30日受付, 2020年1月16日受理

連絡先: 平田 弘美

日本福祉大学看護学部

住 所: 愛知県東海市大田町川南新田 229

e-mail: hirata@n-fukushi.ac.jp

II. 研究目的

本研究の目的は、看護学生が老年看護学の学習や老年臨床看護学実習後でエイジズムが変化するのかを明らかにすることである。

III. 用語の定義

エイジズム：高齢者に対する差別をエイジズム (ageism) と呼ぶ。広義には、すべての年齢層が対象とされるが、狭義には高齢者がただ年をとっているというだけの理由で世間の人々から偏見をもたれたり、さまざまな差別を受けたりすることを指す (鳥羽, 2005)。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

アンケート調査

2. 研究対象

本研究の対象者は4年制A大学看護学部の3年生で、本研究の趣旨に同意した者68名である。

3. 調査方法

日本語版 Fraboni エイジズム尺度を用い、本学部1年生を対象とした老年看護学概論 (前期) の最初の講義時に1度目のアンケート調査を実施した。その後、3年生後期の老年臨床看護学実習終了時に2度目のアンケート調査を実施した。

4. 調査項目

アンケート用紙は無記名とし、以下の内容について質問を行った。

- 1) 基本属性 (年齢, 祖父母との同居の有無)
- 2) 受け持ち患者の年齢 (2度目のアンケート調査)
- 3) 日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版

FSA 短縮版は「嫌悪・差別」, 「回避」, 「誹謗」の3因子14項目で構成され, 「①そう思う」から「⑤そう思わない」の5件法で求め, 1点から5点で得点化する。合計点が高いほどエイジズムが高いことを示す尺度である。

4) 自由記載

①老年看護に対する興味・関心について (1度目のアンケート調査)

②実習による老年看護に対する興味・関心の変化について (2度目のアンケート調査)

5. 分析方法

データ分析には, 統計ソフト SPSS version 21.0 を使用した。それぞれの変数の関係を調べるため, 相関係数と

t検定を用いて分析した。有意水準は5%とした。

6. 倫理的配慮

アンケート調査であるため, 同意書は使用せず回答をもって同意を得たこととした。取得した個人情報は, パスワードの使用などにより厳格なアクセス権限の管理を行った。研究者相互間でのデータのやり取り, 保管にあたっては個人を特定できないようにID化して取り扱うなど, 安全管理の徹底をはかった。

研究終了後, 個人情報を含むデータは消去または裁断処理により廃棄する予定である。なおこの研究は, 滋賀県立大学研究倫理専門委員会の承認 (第572号) を得ている。

V. 研究結果

1年次に配布したアンケート枚数は70部で, そのうち研究参加に同意し, アンケートの協力が得られた者は68名 (回収率97.1%, 有効回答数97.1%) であった。また, 3年次に配布したアンケート枚数は68部で, そのうち研究参加に同意し, アンケートの協力が得られた者は60名 (回収率88.2%, 有効回答数83.8%) であった。

1. 対象者の属性

対象者が3年次の平均年齢は20.82 ($SD = 3.90$) 歳であった。祖父母との同居経験がある者は回答した57名のうち29名 (50.9%), 同居経験がない者は28名 (49.1%) であった。対象者の臨床実習における受けもち患者の平均年齢は, 84.10 ($SD = 7.77$) 歳であった。

2. 基本属性間の相関について

アンケートの質問項目 (祖父母との同居の有無, 臨床実習前後のエイジズム得点, 受けもち患者の年齢) についてピアソンの相関係数を調べたところ, 祖父母との同居の有無と臨床実習前のエイジズムの関係では有意差は認められなかった ($r = 0.005, p = 0.97$)。一方で, 祖父母との同居の有無と臨床実習後のエイジズムの関係では有意差が認められた ($r = 0.27, p < 0.05$)。

受けもち患者の年齢と臨床実習後のエイジズムの関係では有意差は認められなかった ($r = -0.14, p = 0.27$)。

3. エイジズムについて (3年生の老年臨床看護学実習前後での比較)

対象者を1年次と3年次に分類し, 老年臨床看護学実習前後でのエイジズムの変化についてt検定を行った。その結果, 1年次のエイジズムの平均値は28.75 ($SD = 7.62$) 点, 3年生のエイジズムの平均値は25.00 ($SD = 5.61$) 点で, 有意差が認められた ($t(56) = 3.62, p < 0.01$)。また, 祖父母との同居の有無と老年臨床看護学実習後のエイジズムについてt検定を行った。その結果, 同居経験がある3年生のエイジズムの平均値は24.48 ($SD =$

6.21) 点, 同居経験がない3年生のエイジズムの平均値は25.54 ($SD = 4.99$) 点で, 平均値の差はあったが, 有意差は認められなかった ($t(55) = 0.71, p = 0.48$).

4. 自由記述について

1) 老年看護に対する興味や関心 (1年次のアンケート調査)

看護学生の老年看護に対する興味や関心 (1年次のアンケート調査) に関する記載内容を抽出し, 分類した。カテゴリーを【 】, コードを< >で示した。

分析の結果, 【高齢者と関わる機会の少なさ】, 【高齢者に対するマイナスイメージ】, 【高齢者とのかかわり方に対する不安】の3カテゴリーが抽出された(表1参照)。

(1) 高齢者とかかわる機会の少なさ

【高齢者とかかわる機会の少なさ】では, <祖父母にあまり会わない, 一緒に過ごしたことがない>や<高齢者と接する機会が少ない>という記述や, <高齢者と一緒に住んだことがないため感覚がわからない>という記述がみられた。また, 祖父母と同居している, もしくは接する機会がある看護学生でも, <祖母との会話に適当に返答する>というように, 高齢者とのかかわりに対して消極的な意見がみられた。

(2) 高齢者に対するネガティブなイメージ

【高齢者に対するネガティブなイメージ】では, <祖母がひどい認知症だったため, マイナスイメージが強い>や<あまり良いお年寄りの姿を見たことがない>というように, 周囲の高齢者の影響を受けてネガティブなイメージをもっている意見がみられた。また, 老年期にある高

齢者は人生経験が豊富であることから, <言ったことをすんなり受け入れない>や<高齢者と聞くと, 守るべき立場・存在という偏見をもつ>というように, 同じくネガティブなイメージがみられた。

(3) 高齢者とのかかわり方に対する不安

【高齢者とのかかわり方に対する不安】では, これまで高齢者とのかかわる機会がない, もしくは少ないことから, <高齢者や認知症のある方とどのように接するのか>や<会話のネタはどんなことを話せば会話が弾むのか>というように, コミュニケーション方法に関する不安を何人かが記述していた。

2) 臨床実習後の老年看護に対する興味や関心の変化 (3年次のアンケート調査)

看護学生の老年臨床看護学実習後の老年看護に対する興味や関心の変化に関する記載内容を抽出し, 分類した。カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを« »、< >をコード, 「 」はデータとして以降に示す。

分析の結果, 【高齢者への接し方・対応の理解】, 【高齢者の生きてきた歴史・人生・価値観の理解】, 【高齢者に対するポジティブなイメージへの変化】の3カテゴリーが抽出された(表2参照)。

(1) 高齢者への接し方・対応の理解

【高齢者への接し方・対応の理解】では, «コミュニケーション方法の理解», «高齢者の心身の特徴の理解»の2つのサブカテゴリーから構成された。

«コミュニケーション方法の理解»では, 「人それぞれ聞き取りやすさが違うため, その人に合った方法で行う

表 1 看護学生の老年看護に対する興味や関心に関する記載内容

カテゴリー	コード
高齢者と関わる機会の少なさ	一緒に住んだことがないため, 感覚がわからない
	祖父母にはあまり会わない, 一緒に過ごしたことがない
	同居している祖母との会話に適当に返答する
	接する機会が少ない
高齢者に対するマイナスイメージ	祖母がひどい認知症だったため, マイナスイメージが強い
	「最近の若い人は…」と看護師に信頼をおけない高齢者がいる
	「痛い」と毎日言われ, 面倒くさいと思う
	高齢者と聞くと, 守るべき立場・存在という偏見をもつ
	自分の言ったことをすんなり受け入れない
高齢者とのかかわり方に対する不安	あまり良いお年寄りの姿を見たことがない
	会話のネタはどんなことを話せば会話が弾むのか
	高齢者や認知症のある方とどのように接するのか

(聞こえやすいほうの耳から、ゆっくり、単語を区切る、大きめの低音)」や「言語的なこと(声・スピード・内容)、非言語的なこと(表情)で対象の方の反応が変わった。楽しいこと、人生について辛いことを話すうえで言語的・非言語的なものは大切だと感じた」というように、高齢者と実際に会話を行うことで発見したコミュニケーション技術の重要性を理解した記述があった。

《高齢者の心身の特徴の理解》では、「認知症がある方でも自分の思いを伝えたいという気持ちがあるということがわかった」や「高齢者の身体的・精神的・社会的特徴やその人のこれまでの生活背景などあらゆる面が関係してその人を構成しており、その人に看護を提供するうえでまずその人の全体像を捉えることが大切だ」という記述があった。

(2) 高齢者の生きてきた歴史・人生・価値観の理解

【高齢者の生きてきた歴史・人生・価値観の理解】では、

《高齢者の人生観・価値観の理解》、《高齢者の時代背景の理解が貴重な体験》の2つのサブカテゴリーから構成された。

《高齢者の人生観・価値観の理解》では、「高齢者の方は、過去の思い出を大切にしつつ、今を懸命に生きておられることがわかった」や「老年期にある方は、人それぞれ違う人生を歩んできて、経験や価値観・考え方も違って興味深かった」、「長く生きておられるため、その人の生活習慣やこれまでに培ってきたことを尊重しながらかかわることで個別性のある看護につながっていくのだと思ひ、以前より興味がもてた」というように、実習をすることで高齢者の人生観や価値観を理解し、それを看護に活かす必要を感じたという記述がみられた。

《高齢者の時代背景の理解が貴重な体験》では、「昔の話聞かせていただけのことを貴重な経験だと感じるようになった」や「私の知らないことやその人のこれまでの人生について聞かせてもらうことができ良い経験に

表2 看護学生の臨床実習後の老年看護に関する変化の記載内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
高齢者への接し方・対応の理解	コミュニケーション方法の理解	コミュニケーションの手段が一人ひとり異なる
		人生の先輩として尊敬する(敬語、名字で呼ぶ)
	高齢者の心身の特徴の理解	言語的なこと(声・スピード・内容)、非言語的なこと(表情)で対象の反応が変化する
		人の世話になることで自尊心の低下があるため、自尊心を保てるように関わる
高齢者の生きてきた歴史・人生・価値観の理解	高齢者の人生観・価値観の理解	認知症がある方でも自分の思いを伝えたいという気持ちがある
		身体的・精神的・社会的特徴や生活背景などからその人の全体像を捉える
	高齢者の時代背景の理解が貴重な体験	昔話を聞くことで、対象者の振り返りに繋がる
		人それぞれ違う人生を歩み、経験や価値観・考え方も違う
高齢者に対するポジティブなイメージへの変化	高齢者への興味・関心の増強	過去の思い出を大切に、今を懸命に生きている
		生きることに活気がないわけではなく、今のこの時期を大切にしている
	高齢者に対する尊敬	その人の生活習慣や培ってきたことを尊重する
		昔話を聞かせていただけることを貴重に感じた
		知らないことやこれまでの人生について聞かせてもらい良い経験になった
		高齢者がかわいらしく感じる
		一人ひとり個性的で面白い
		もっと関わる機会があったらよい
		高齢者の方から学ぶことは多い
		尊敬できる

なったと思う」というように、高齢者とのかかわりによって学生が昔の出来事や生活に触れるよい機会になったという記述があった。

(3) 高齢者に対するポジティブなイメージへの変化

【高齢者に対するポジティブなイメージへの変化】では、《高齢者への興味・関心の増強》と《高齢者に対する尊敬》の2つのサブカテゴリーから構成された。

《高齢者への興味・関心の増強》では、「患者さんがとても可愛く感じるようになり、人の人生の複雑な背景をアセスメントし、その人の個性に合わせた看護を展開することがとても楽しくやりがいを感じるようになった(以前は高齢者が苦手・嫌悪感を抱きがち・高齢者もよくわからない状態だった)」や「色々な高齢者と接して、一人ひとり個性的で面白いと思った」というように、実習後に高齢者に対して興味や関心が増強したという意見がみられた。

《高齢者に対する尊敬》では、「長い人生を生きてこられた高齢者の方から学ぶことは多い」や「家族での仲が悪いので家の中の老人は嫌いだだったが、実習に行くと、実習で関わる高齢者は尊敬できて好きになった」というように、老年臨床看護学実習を通して高齢者と関わることで、高齢者に対して尊敬の姿勢を示し、ポジティブなイメージへと変化していた。

VI. 考 察

本研究では、看護学生の老年臨床看護学実習前後でのエイジズムの変化について、t検定を用いて比較を行った。その結果、対象者が臨床実習前の1年次のエイジズムの平均値が、実習終了後の3年次の平均値よりも有意に高かった。これは、老年臨床看護学実習をとおして高齢者と関わることで、エイジズムが低くなったと考えられる。佐野(2011)は、臨床実習で高齢患者を受けもつことでエイジズムが低下すると報告している。それは、高齢者の一般理解からさらに受けもつ高齢者個人を理解したいという姿勢がエイジズムを低くするのではないかと述べている(佐野, 2011)。今回、3年次に実施したアンケート調査の自由記載から、＜認知症がある方でも自分の思いを伝えたいという気持ちがある＞や＜その人の生活習慣や培ってきたことを尊重する＞といった対象となる高齢者への接し方・対応の理解や高齢者の生きてきた歴史・人生・価値観の理解を示す記述がみられた。これらは、看護学生が実習で関わる受けもち患者を理解したいという思いで接し、高齢者に対する理解が深まり、エイジズムが低くなったのではないかと考える。

朴(2017)は、エイジズムに影響を及ぼす要因として、「経験」「認識」「知識」「感情」「基本属性」「他者との関係」

を挙げている。特に「経験」では、エイジズムを低くする傾向にある要因として、高齢者とのかかわり、高齢者の生活歴を傾聴する体験、認知症高齢者看護体験、ボランティア体験を挙げている。1年次に実施したアンケート調査の自由記載より、＜祖父母にあまり会わない、一緒に過ごしたことがない＞や＜同居している祖母との会話に適当に返答する＞というように、高齢者とかかわる経験の少なさや積極性に欠ける記述がみられた。また、老年看護学実習前であることから、【高齢者とのかかわり方に対する不安】が顕著であった。さらに、知識面において、1年生は老年看護学の学習が始まったばかりであり、知識量においても3年生と比較すると少ないといえる。したがって、エイジズムに影響を及ぼす要因である「経験」「知識」が1年次には少ないため、エイジズムが高かったのではないかと考える。

村田(2008)は、高齢者を理解するためには、学生が高齢者の話や生活背景を聞き交流する体験が必要であると述べている。また、佐野(2010)は、学生が実習において高齢者と接し、その人を尊重するかかわりの重要性を実感することが、エイジズムを低くする経験になると述べている。今回実施した3年次のアンケート調査の自由記載から、実習中に看護学生が、高齢者への接し方・対応や、高齢者の生きてきた歴史・人生・価値観の理解が深められたことが記述されていた。これらより、高齢者一人ひとりの特徴に合わせて、その人に適したコミュニケーション方法を模索しかかわることや、高齢者の経験や価値観を尊重する態度を示すことが、高齢者とのかかわりを円滑にし、高齢者理解に繋がったと考える。以上より、実習を通して高齢者とかかわり、コミュニケーションを通して高齢者理解に繋がりが、それがエイジズムを低くしたのではないかと推測された。

祖父母との同居の有無と老年臨床看護学実習前後のエイジズムの関係について、ピアソンの相関係数を用いて調べた結果、祖父母との同居の有無と臨床実習後のエイジズムの関係で有意差が認められた。しかし、祖父母との同居の有無と臨床実習後のエイジズムの関係について、t検定を用いて比較を行ったところ、同居経験のある学生の方がエイジズムの平均値が下がったものの有意差は認められなかった。このことから、今回の研究において同居の有無がエイジズムに強く影響を及ぼさないことが考えられる。大谷(1995)は、単に高齢者と同居しているという経験が高齢者イメージに影響を与えるのではなく、祖父母と接する頻度や内容が重要であると述べている。また、吉田ら(2017)は、同居経験は高齢者の肯定的な側面だけではなく、否定的な側面についても印象付けられ、高齢者への誤解に影響を及ぼす可能性が考えられると述べている。今回の研究からも1年次のアンケート調査で、同居経験がある学生の記述には、＜「痛

い」と毎日言われ、面倒くさいと思う>や<同居している祖母との会話に適当に返答する>、<祖母がひどい認知症だったため、マイナスイメージ強い>といった記述がみられた。これらの記述から、単に祖父母との同居の有無がエイジズムに影響を及ぼすのではなく、高齢者とのかかわり方の内容がエイジズムに影響を及ぼすことが考えられる。しかしながら、有意差はなかったものの同居経験のある学生の方がエイジズムの平均点が下がっていた。今回は学生数57名での結果であったが、対象者数が増加すれば同居の有無もエイジズムに影響を与えたかもしれないと考える。

Ⅶ. 研究の限界

本研究は、看護学生を対象に、老年看護学の学習や老年臨床看護学実習後でエイジズムが変化するかを明らかにすることを目的に、アンケート調査を実施した。しかし、1年次から3年次の2年間に、対象者は他の教科・実習を経験している。エイジズムに関して、老年看護学だけではなく他の教科・実習の影響も考えられるため、結果への影響は老年看護学だけに限定はできない。

また、本研究の対象者は57名と少ないため、本研究結果を一般化することは難しい。今後、対象者を増やし、さらに調査を進める必要があると考える。

Ⅷ. 結論

本研究では、看護学生の老年看護学の学習や老年臨床看護学実習後でのエイジズムの変化について、t検定を用いて比較を行った。その結果、老年臨床看護学実習前よりも終了後に看護学生のエイジズムが低くなることが明らかとなった。また、老年臨床看護学実習後に実施したアンケート調査の自由記載から、実習をすることで高齢者の人生観や価値観を理解し、それを看護に活かす必要性を学んでいることがわかった。以上より、臨床看護学実習を通して高齢者と関わることで高齢者を理解し、エイジズムが低くなることが示唆された。

祖父母との同居の有無と老年看護学実習後のエイジズムの関係では、平均値の差はあったが、有意差は認められなかった。このことから、単に同居経験の有無がエイジズムに影響を及ぼすのではなく、老年看護学実習での高齢者との関わり方の内容がエイジズムに影響を及ぼすことが示唆された。

謝辞

本研究を実施するに当たり、ご協力をいただきました対象者の皆様に心より感謝申し上げます。

文献

- ・朴蕙彬 (2018). 日本のエイジズム研究における研究課題の検討ーエイジズムの構造に着目してー, 同志社大学社会学会, 3, 139-156.
- ・厚生労働省 (2014), 患者調査. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/14/>
- ・三輪のり子, 金原京子 (2015). ゆとり世代の看護学生における高齢者観の特徴「普段みたりする像」「将来なりたい像」「将来なりたくない像」「自分にとっての存在」の視点から読み解く. 老年看護学, 19 (2), 47-57.
- ・村田日出子, 小野田真弓, 高野真由美 (2008). 看護学生のエイジズムに関する要因ー老年看護学概論および実習前後のエイジズムの変化ー, 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 4,12-17.
- ・内閣府 (2018), 平成30年版高齢社会白書. https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/zenbun/s1_1_1.html
- ・大谷英子, 松木光子 (1995). 老人イメージと形成要因に関する調査研究 (1) 大学生の老人イメージと生活経験の関連, 日本看護研究学会誌, 18 (4) ,25-37.
- ・佐野望, 檜原登志子 (2011). 看護学生のエイジズムと高齢者看護学実習との関連, ー病院実習と福祉施設実習の学習要素からの検討ー, 共立女子短期大学看護学科 紀要, 6, 1-10.
- ・佐野望, 檜原登志子, 赤坂寛子 (2010). 看護学生の高齢者の知識と看護の学びによるエイジズムの関連ー高齢者看護学実習 I の学習効果ー, 共立女子短期大学看護学科紀要, 5, 7-16.
- ・手島洋 (2015). 日本の高齢者観の形成と現状. 人間と科学, 県立広島大学保健福祉学部誌, 15 (1), 23-34.
- ・鳥羽美香 (2005). エイジズムと社会福祉実践. 文京学院大学研究紀要, 7 (1), 88-100.
- ・吉田浩二, 辻麻由美, 原田文子, 大山祐介, 竹嶋純平, 宮原春美 (2017). 看護学生のエイジズムに関する研究, 保健学研究, 30, 39-46.